

「鈍感力」 渡辺 淳一 集英社

2007年初版のベストセラーで、既に読んでしまった人もいるかもしれませんが、本書の「鈍感力」なるものが、私たちがこれからの大変困難な時代を生き抜いていく上で必要な力とも感じましたので、敢えて推薦させていただきます。

著者は札幌医大卒業後医師として大学病院に勤めた後、小説家となった人です。「失楽園」や「愛の流刑地」などの代表作もありますが、私の嗜好に合うジャンルではないため、残念ながら本著者の小説は1冊も読んだことはありません。小説に興味はありませんが、北海道出身の著名人でしたから、刊行された直後に本書を購入した覚えがあります。平易な文章でしかも230ページ足らずの本なので、ちょっとした空き時間に肩の力を抜いて読みきることができると思います。

通常「鈍感」というとマイナスのイメージで捉えられがちです。「鈍感」の対義語は「敏感」ですが、我々が求められているのは、どちらかというこの後者の感覚でしょう。この「敏感」という言葉の比喻として、よく「アンテナを張り巡らせ」と使われることがあります。これはどんなに些細でも有益な情報である可能性があるので遺漏なく受け止めようと注意深くするとき用いられます。まさに最先端の研究を推し進める上で、あるいはビジネスを成功に導く上で、強く求められる感覚であることは間違いありません。本書のタイトルが、この「敏感力」ではなく、「鈍感力」となっている理由は、本書を読めば自ずと分かりますが、概要としては人間関係や仕事をする上での精神的な有り様について述べられています。具体的に言うなら、失敗して傷ついてもすぐに立ち直ることができ、どんな時でもよくよしないのでへこたれず、物事を前向きに捉える「力」のこのようです。これらは、至って当たり前のことばかりで、新たな知見や考え方もありません。強いていえば、本書を読むことは、私たちの中にある漠然としたものを再認識するためのプロセスとも考えられます。仕事に関しても、自身の医師としての体験を通して「鈍感力」の大切さを説いています。兎角、今の本校学生を含めた若者は「打たれ弱い（叱られると落ち込む等）」と揶揄されることがあります。兄弟や同年代の子供たちが少ない中、両親からは大事に育てられ、他人から叱られたり、喧嘩をしたりという経験のなさが要因の一つとして挙げられることもしばしばです。また、今の日本社会は昔ほど経済的・時間的余裕がなく、また以前私たちが持っていたとされる「大らかさ（精神的余裕）」も影を潜め、結果として日本人の多くが得体の知れない何かに「苛々している」ようにさえ見えます。こんな閉塞感漂う時代だからこそ、本書の「鈍感力」なるものが、私たちには必要であると思えてなりません。勿論、物事はいろいろな要素が複雑に絡み合っていますので、これがすべてと言い切る積りは更々ありませんが、何らかの機会に本書を一読して頂ければ、幸いです。